

# 閻魔大王(真)と英雄王(偽)♀の物語

オキカ

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

神代が終わった世界に退屈していた閻魔大王と、メソポタミアの豊穰神エアの血を引く踏み台（笑）が織り成す物語。

# 目次

序章

プロローグ [1]

—

1

プロローグ [2]

—

8

主要人物の設定

—

27

〈第1章〉

第一話

—

45

第二話

—

64

第三話

—

86



## 序章

## プロローグ「1」

-----

side

俺は、退屈で死にそうだ。

俺は閻魔大王。

地獄を統べる魔王。

「今日も1日、地獄は平穏だ。

死んだ人間の魂が降りて来て、ソレを鬼と死神が捕まえる。  
何の異変も無い平和な世界だ。

「閻魔大王「…今日も居ないか」

俺は誰にも聞こえない様に小さく呟いた。

???? 「お前の興味を引く者か？」

「……ふと、背後から声が聞こえた。

俺は振り返り、その声の主を見て少し溜息を吐いた。

閻魔大王「ハーデスさん、か……」

その人は俺の上司……というより、俺の師でもある冥王ハーデス。

俺はハーデスさんの姿を見て、再び溜息を吐いて疑問を投げかけた。

閻魔大王「何故、ここに？」

ハーデス「いやあ、後輩が何か悩んでるらしいからな。その話を聞きに来たんだよ。

まあ、あんまり聞くまでも無い様だが……」

俺は仕方なく最近の悩みをハーデスさんに打ち解けた。

閻魔王「ハーデスさん。俺……この地獄を統べる魔王になってから、ずっと感じてた事があるんだ」

ハーデス「ほう？何だ、言ってみろ」

俺はハーデスさんに向き直って、愉悅に染まったその顔を捉えながら話した。

閻魔王「……さっきもアンタが言ってたただろう？そう、俺の興味を引く者が居ないんだよ。この地獄——否、この世界には」

俺の最近の悩み。

それは、俺の興味を引く者が居ない事。

昔はまだ唯の鬼神だったから、色んな奴とも戦ったし、色んな女とも遊んだ。

果てはエジプトの太陽神ラーとも喧嘩した程のヤンチャっぷりだ。

昔ー神代の頃は、とにかく楽しかった。

『地球』を滅ぼせる力を持つ奴が沢山いて、あらゆる世界がまだ一つだった時代。

あの頃の俺は、とにかく色んな事に興味が湧いて楽しんでいた。

ハーデス「成る程な。つまりはお前…」

閻魔大王「ああ、そうだ。俺は今、物凄くイラついてんだ。何一つとして俺を楽しませる事が出来ない。昔はいた神々や英雄達も神秘が廃れたこの時代では、ロクに信仰を集める事が出来ないでいる…」

ハーデス「ああ、俺達もそうだ。特に俺なんかはお前よりも信仰が少なくなった。今じゃあ、そこいらの土地神共を下回る程の信仰度だ。このままでは…」

閻魔大王「ああ。俺達も消える」

俺達みたいな神々や神格化された英雄は、基本的に人間の信仰を集めてその存在を



保っている。

世界最古の古代文明メソポタミアよりも前の神々は、西暦が始まった頃には消滅してしまつた。

何故ならば、その神々の記録も無ければ、その神々のことを記憶している人間もいないからだ。知名度が薄ければ薄れる程に神々は衰退していく。

ハーデスさんはギリシア神話で最高位の知名度と信仰を誇る神だけあつてちよつと薄れた程度では消滅しないが、ここ最近ではギリシア神話のオリュンポス十二神の神々が消滅している。

俺もインドや日本、中国ではそれなりの知名度と信仰を集めているので少しくらい信仰率が落ちた程度では消滅しない。

ハーデス「人間達は自分達の文明だけで生き延びている。俺達神々が出張る必要がもう無いのだろう」

閻魔大王「その結果がコレか。：フンっ、笑わせるぜ。人間が自力で生き延びれば生き延びる程に、俺達みたいな神々はどんどん死に絶えていくのか……」

俺達は、自身の未来に失望している。

人間に寄生しなければ生きられなくなった神々はこの世界ではもう長くは続かない。

なんの変化も異変も現さなくなった退屈な地獄を眺めていると、ふと地獄の天蓋から懐かしい気配を感じた。

閻魔大王「何っ…?」

ハーデス「この気配は……!」

俺達が地獄の天蓋を見つめていると、虚空に次元を割ったかの様な穴が空いた。

閻魔大王「まさかアンタが来るとは…」

ハーデス「…俺も驚いた」

そして、その虚空から一人の豊穰神が舞い降りた。

?? 「久方振りだな、冥界の王達よ」

閻魔大王 「古代メソポタミアの守護神」

ハーデス 「豊穡神、エア……」

| | | | | 閻魔大王 s i d e o u t | | | | |  
| | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | | |



閻魔大王「俺にだと？」

俺は珍しい態度を取るエアに懐疑の視線を向けながら睨み付けた。

エア「ああ。だがその前に一つ、お前に尋ねたい事がある」

閻魔大王「…何だ？」

エア「お前は一時期、人間の娯楽にハマっていた様だが、その時に『二次創作』なるものに興味が湧いたらしいな？」

閻魔大王「ああ、そうだな。でもアレは、かなり昔の事だぞ？」

エア「まあ、構わん。そこでお前、その二次創作とやらに『神様転生』というカテゴリがあつたのを覚えているか？」

閻魔大王「あ、ああ。確かにあったな……」

……先程から、どうにも腑に落ちない。こいつは一体、何が言いたいんだ？

ハーデス『神様転生』ってアレか？俺達が人間に能力を与えて異世界に転生させるって内容だったか……？」

エア「……そう、ソレだ」

俺はいよいよ変になったエアに本題を促す様に言った。

閻魔大王「つまりだ、エア。アンタは何が言いたいんだ？俺に何をさせたい？」

エアは俺の視線に自分の視線を合わせると話し始めた。

エア「今回のお前に頼みたい事はソレだ。『神様転生』とやらだ」

閻魔大王「…はあ？」

イマイチ俺はエアが何を言いたいのか理解出来ない。

閻魔大王「どういう事だよ？」

エア「実はな、1000年位前に人間界に降りて日本で遊んでいた時に、少しばかりやらかしたな…。興味本位で入った風俗の娘を孕ましてしまった…」

閻魔&ハーデス「…はあっ!？」

…ちよつと待て!？」

コイツ今、なんて言った!？」

閻魔大王「……………って、待て待て待て!？」最高位の神性を持つアンタが、人間の女を孕ませただと!？」

ハーデス「アホか！アンタは!?ゼウスの野郎と同じ穴のムジナじゃねえか!!」

そもそも最高位の神性を持つ神は、そんな易々と下界に降りられない。

それこそ世界最古の神話の神、エアともなればメソポタミアの神域から出る事すらも許されない。

俺は溜息を吐いて、エアを睨み付けた。

閻魔大王「はあ…。まあ、この際だ。出来ちまつたモンは仕方無い。地獄の統治者としては簡単に“殺せ”とは言えん」

ハーデス「……俺も激しく同意だ」

俺はハーデスさんと領き合いながら、エアの用件を聞いた。

閻魔大王「それでアンタはどうしたい？」

エア「…まあ、不本意とはいえ俺の子だ。他の神々にバレたら即処分だろう」



……だから俺等の所に来たのか。

エア「そこでだ、俺の子を『神様転生』とやらで異世界に転生させてほしい」

閻魔大王「……。つて、ちよつと待て。転生させてほしいって言われても、その子供の魂は此処に來ているのか？

まさか、100年も前に生まれた子供の魂を今から探すのかよ？」

流石に生まれて1世紀も経つてたんじゃあ、既に死んでいるだろうし生きていたとしてもかなり衰弱しているだろう。

半神半人とはいえ半分は人間だ。寿命は人間と同じだし、死ぬ時はちゃんと死ぬ。

エアは俺の問い掛けに対して自信満々な表情で答えた。

エア「案ずるな。俺の子の魂ならば、先程この地獄に着いた時に回収をした」

そう言つて、エアは掌に人間1人分の魂を乗せて見せて来た。

閻魔大王「はっ…？何時の間…!?」

勿論、勝手に死んだ人間の魂を掬い上げるのも立派な掟破りである。

無断現界と靈魂竊取。

前者はともかく、後者は本当にマズイ。

靈魂を勝手に弄るのは大罪だ。昔、地獄を治めてたハーデスさんの後輩が靈魂を弄つて遊んでたのがオシリスの旦那にバレて、深淵に叩き落されたのを見た事がある。

閻魔大王「オイ、エア！マズイっての!!靈魂竊取は大罪だぞ…!」

ハーデス「もしバレたら、オシリスの旦那に殺されちまうぞ!!」

俺達はエアに止める様に促した。

そしたら、エアは意地悪い笑みを浮かべて俺達の肩を叩いた。

エア「安心しろ。オシリスの坊やにはちゃんと許可取って来た。ホレ!」

そう告げたエアは1枚の紙を俺達に見せた。俺達はその紙を見て驚愕した。

ハーデス「コイツは…っ！」

閻魔大王「靈魂操作の許可書だ?!」

オシリスだけが発行出来る許可申請書。

本来なら原罪に匹敵する程の靈魂操作を、この許可書さえあればやむ得ない場合のみ許される。

ハーデス「発行日時は!？」

閻魔大王「今日の1時間前だ！」

俺はエアに視線を向けて問い質した。

閻魔大王「オイ、アンタ。オシリスの旦那をどうやって説得したんだ？事が事だけにマトモな理由付けたって貰えないぞ！」

エア「なあに、簡単さ。ちよつとオシリスの隠し事を、エジプトの神話体系にバラしただけだよ」

……オシリスの旦那、御愁傷様です。

俺はオシリスの旦那の苦勞を一瞬だけ考えた後にエアの右手に乗る魂を見て答えた。

閻魔大王「……はあ、分かったよ」

エア「うん？」

閻魔大王「アンタの子を転生させれば良いんだろう？分かったから早くその子を転生させる準備を済ませな」

エア「ooooooooああ、分かった」

エアは手早く右手に乗る子供の魂を転生させる準備に取り掛かった。

ハーデス「はあ、仕方無いか。おい閻魔、天獄門で良いのか？それとも地獄門か？」

閻魔大王「天獄門でよろしく…」

俺達はその子の魂の器を作ったり、異世界への扉の開門をしたりと準備を始めた。

丨丨丨丨丨丨丨丨丨丨

丨丨丨丨丨丨丨丨

丨丨丨丨丨

丨丨

丨丨

丨丨丨丨丨

――  
――  
――  
――  
――

閻魔大王「ふう、出来た…と」

ハーデス「天獄門なんて開くのは久方振りだからな、かなり時間が掛かった」

俺達は久方振りに見る馬鹿でかい鳥居の前に立っていた。

エア「おーい、此方も終わったぞ」

すると、エアが黄金に輝く魂を持って俺達のもとに駆け寄って来た。

……………つて、オイ。

閻魔大王「アレ??なんか可笑しくない?半神半人の魂にしては輝き過ぎじゃね?」

ハーデス「つーか、この輝き。どっかで見た様な気がしてならないんだが…」

ハーデスが零した眩きを聞いたエアは、何やら変に良い顔をして答えた。

エア「ーだつて、英雄王ギルガメツシュの能力と肉体を与えたからな」

.....。

閻魔&ハーデス「はっ?」

……えーと、つまり半神半人つてだけじゃなくて、もしかして『F a t e /』の英雄王ギルガメツシュの能力と肉体を与えたつて事?

エアは呆然としてる俺達を放つておいて、黄金に輝く魂を人の形に顕現させた。

エア「さあ、出て来な。我が娘よ」

黄金に輝く魂は、光り輝きながら人の身体を形成していき、そしてその姿を現した。

??????

「……ふう、漸くか……」

その姿は、金髪のロングヘアに赤眼の瞳。黒いシスター服を身に纏い、胸元には金のロザリオが提げられている。

………はい、どう見ても姫ギルです。ありがとうございます。

ただし所々が違う。金髪だが、その先端に赤いメッシュが入っている。

そして眼は確かに赤眼だが、右目は紅色に対して左目は翠色をしている。

閻魔大王「えー、マジかよ……」

ハーデス「そんなのアリか……?」

俺達2人は、エアの子の容姿を見て少し引いてしまった。



?????  
「ぬ？なんじゃ、貴様等は？」

閻魔大王「……（口調は違うのか……）」

ハーデス「……（というか姫様口調？）」

俺達が呆然とその子を見ていると、横からエアが割つて入り、その子に挨拶をした。

エア「おはよう、ギルガメス」

ギルガメス「ん？ああ。おはよう、父上」

エア「さつきも話したけれど、お前はこれから異世界に転生するんだ。良いな？」

ギルガメス「うむ、構わん。それで其奴等はなんじゃ？」

その子——ギルガメスは俺達を指差してエアに聞いた。

エア「ん？ああ。彼等はお前の転生を行ってくれる者達だ。銀髪がハーデス、黒髪が閻魔大王だ」

ハーデス「あ、ああ。よろしく」

閻魔大王「…よ、よろしく」

ギルガメス「うむ、よろしく頼むぞ！」

俺達は少し気圧されながらギルガメスと挨拶を交わした。  
するとエアが横から俺の肩を叩いて来た。

エア「なあ、少し良いか？」

閻魔大王「ん？何だよ？」

エアは少し真剣な表情をして話し始めた。

エア「実はな、お前にはギルガメスに着いて行って貰いたいんだが……」

閻魔大王「はっ？……いや、無理だろ。俺は地獄を治めなくちゃいけない。幾ら何でも流石に……」

エア「おっと、こんな所にオシリスの坊やからの伝令書が……」

閻魔大王「……無理………は？」

俺はエアが差し出して来た紙を見ると、そこにはオシリスからの命令が書かれていた。

『ヤマラージャー閻魔大王へ。』

今日付で地獄の統治者から解任する。  
オシリスより』

閻魔大王「……………ナニコレ？」

エア「まあ、という訳で頼むぜ！」

エアは中々に良い笑顔で何やら口走っていたが、俺の耳には全く入らなかった。

そして、ふと後ろから服を引っ張られる感覚がして振り返ると、ギルガメスが俺を見てアレコレ言い始めた。

ギルガメス「良いか、閻魔。お主は今から妾のパートナーじゃ！ 今後は妾の手となり足となり、頑張るのじゃぞ!!」

閻魔大王「えっ? ……マジで？」

俺は動揺しまくりの視線を泳がせてハーデスさんに向けると、ハーデスさんは同情め

いた表情を見せていた。

ハーデス「うん、ガンバ……………」

閻魔大王「えっ？いや、えっ？うそ！」

ギルガメス「……さあ、行くぞ！」

ギルガメスは焦る俺を引っ張り天獄門に向けて歩き出した。

エア「行つてらっしゃあーい！」

ハーデス「取り敢えず、いつてら……………」

エアもハーデスさんも、俺を救う気は微塵も無いらしい。

閻魔大王「えっ!?!ちよつ、マジでか!」

ギルガメス「さあ!ギルガメス、参る!」

そして俺はギルガメスと共に天獄門を潜り抜けた。

—————閻魔大王 side out—————

—————

## 主要人物の設定

「ギルガメツシュ（ギルガメス）の設定」

### 《プロフィール》

名前：ギルガメツシュ

真名：ギルガメス

性別：女性

身長／体重：156 cm／46 kg

属性：混沌・善

起源：進化

### 《パラメーター》

筋力：A

耐久：A

敏捷：A

魔力：A++

幸運：EX

《魔術回路》

・メイン魔術回路

↓本2000本

・サブ魔術回路

↓各500本（1000本）

・合計本数

↓3000本

《能力》

<スキル（英霊化した場合）>

1. class別スキル

クラス：アーチャー

①対魔力：C++

第二節以下の詠唱による魔術行使を無効化する。大魔術、儀礼呪法など大掛かりな魔術は防げない。



しかしエアから受けた加護によって、神代以降の殆どの魔術を無効化する。事実上、現代の魔術ではギルガメスに傷を付けられない。

②単独行動：E X

マスターが不在でも行動出来る能力。宝具などの膨大な魔力を使用する場合ですら、マスターからのバックアップは必要無い。

クラス：キャスター

①陣地作成：E

魔術師として、自らに有利な陣地を作り上げるスキル。小規模な“結界”の形成が可能。人払いや防音といった初歩的な結界魔術。

②道具作成：E

魔術的な道具を作成する技能。ギルガメスには魔術師の心得が無い為、簡易的な魔術礼装の作成が限界。

2. 保有スキル

①黄金律：A+

身体の黄金比ではなく人生において金銭がどれほどついて回るかの宿命。世界が誇る大富豪すら、歯牙にも掛けぬ金ピカぶり。未来永劫に渡って、金には困る事は無い。

② カリスマ：A―

大軍団を指揮する天性の才能。Aランクは、人間として獲得しうる最高峰の人望といえる。ギルガメスには確かに一国の王としての器はあるのだが、精神的に少し幼い為に微かにランクダウン。

③ 神性：A++

神霊適性を持つかどうか。ランクが高い程に物質的な神霊との混血とされる。豊穡神エアと直接的な血の繋がりを持つ。そしてその依代としている肉体は、神の血が2/3も流れている英雄王ギルガメッシュである。

④ 千里眼：A

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。透視、未来視さえも可能とする。

⑤ 直感：A―

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を「感じ取る」能力。研ぎ澄まされた第六感、もはや未来予知に近い。視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。本人が無自覚の為、僅かにランクダウンしている。

⑥ 魔眼：B

“幻覚の無効化”と“魔力の視認化”の魔眼を保有している。同ランク以下の幻覚を無効化して、それ以上の幻覚作用を半減させる。そして、魔力を視認化して色で見分

ける事が出来る。

⑦ 魔術：D+

オードックスな魔術を習得。魅了の魔術や簡易的な結界魔術を使用する。両眼には異なる能力を持つ魔眼を所有している。

⑧ 魔力放出：B-

武器ないし自身の肉体に魔力を帯びさせて瞬間的に放出する事によって、能力を飛躍的に向上させる。本人が無意識で使用している為、僅かにランクダウンしている。

<戦闘技術>

? エア直伝の剣術

? エア直伝の槍術

? エア直伝の弓術

<魔術>

1. 結界魔術

2. 魔眼

① 幻覚無効化 (右目)

② 魔力視認化 (左目)

3. 魅了の魔術

<魔法>

1. 騎士ザ・ナイト

↓ // FAIRY TAIL のエルザの換装魔法。

2. 豊穡スベル・オウ・エンキの神水

↓ メソポタミアの豊穡神エアが、こっそり仕込んだ魔法。

ギルガメスは、この魔法が自身に備わっている事を知らない。

この魔法は攻撃手段としては単なる流水魔法に過ぎないが、本来の使い方は攻撃手段ではない。

この魔法の本来の用途は『創世』である。

世界最古の淡水の海『アプス』の主であるエアが、大地に豊かさを齎らす為に編み出した創世魔法。

この魔法によって生まれる水は、枯れた大地には潤いを与えて豊かさを齎らし、傷付いた者には癒しを与えて肉体を活性化させる。

エアの血を引く娘だからこそ扱える魔法。

《宝具》

『ゲイト・オブ・ハビロン  
王の財宝』

ランク：E〜A++

種別：対人宝具

レンジ：1〜

最大補足：10000人

『エヌマ・エリシュ  
天地乖離す開闢の星』

ランク：EX

種別：対界宝具

レンジ：1〜999

最大補足：10000人

『エヌマ・エリシュ  
混沌に輝く創世の星』

ランク：EX

種別：対界宝具

レンジ：1〜9999

最大補足：1万人

《Weapon》

『乖離剣エア』

『終末剣エンキ』

『創世剣アプス』

『王律鍵バヴルイル』

『天の鎖（エルキドゥ）』

### 《容姿》

『Fate／protoreplica』の姫ギル。眼はオッドアイで、紅い右目と翡翠の左目を持つ。髪のは先端には赤いメツシユが入っている。

通常時の服装は、金のロザリオ、黒いシスター服、黒いニーソックス、黒いショートブーツ。

そして時々、『Fate／stay night』のギルガメツシユの服装（黒いライダースーツ）。

戦闘時の服装は、『Fate／protoreplica』の姫ギルの黄金の甲冑。ネイキッドモードの格好に左腕の部分を足した様な感じ。

### 《備考》

「ギルガメスについて」

エアの不本意で生まれた子。

生まれてすぐにエアが母親諸共攫って、メソポタミアの神域でひっそりと暮らしていた。

母親が隠れオタクであった為、日本の様々なアニメや漫画に触れる事が多かった。

その中でも特に『Fate／シリーズ』のギルガメッシュが好きらしい。

半神半人である為、寿命は人間と同じ100年前後で死ぬ。

転生後は寿命で死ぬ事は無くなり、過保護なエアがギルガメスからの要望に応えまくった結果、チートな肉体と能力を手に入れた。

姫様口調（似非）なのは英雄王の真似をして口調を変えた結果。

時折、英雄王みたいな口調で話すのだが、上手く真似出来ない。

超チートな肉体と能力を手に入れたのは良いが、戦闘経験なんてものは無く、メソポタミアの神域では本当に姫としての生活をしていたので、いざ戦闘になると全力で戦えない。

ちなみに神の生涯は終わりが無い。

その為、僅か100年しか生きていないギルガメスはまだまだ子供である。

実はエアと一緒に過ごした事が殆ど無く、転生後一緒に居てくれる閻魔大王に父性と

恋慕を感じている。ちなみにエアと共に過ごした時間は僅か1年程度で幼少期の間だけである。

しかもその時は、戦闘技術と簡単な結界魔術と魅了の魔術程度しか教えてくれなかった(本人は「魅了の魔術」を習得している事を恥ずかしくて、滅多にその事を話したがらない)。

転生後のギルガメスはデミ・サーヴァントとして存在する為、今後も良い成長が見込めるだろう。

基本のパラメーターは全てAランクから始まり、しっかりと鍛え続ければ何れはEXへと至る可能性もある。

ギルガメスの戦い方はギルガメツシュ直伝の『王の財宝』による砲撃とウルク式の武器術。遠距離戦では『王の財宝』の砲撃、近距離戦ではウルク式・武器術の白兵戦、といった戦況に合わせて戦闘方法を変化させる。

ウルク式の武器術とは言ってもしっかりとした型や技がある訳ではなく、ほぼ喧嘩殺法の戦闘技術である。

古代ウルクの武器術は対魔物(魔獣)を想定して生まれた戦闘技術の為、かなり実践的な我流戦法になる。

特に決まった型や技を持つ者に対しては、かなり強いアドバンテージを得られる。



ギルガメスはエアとの修練とギルガメツシュとの戦闘を経て、自己流のウルクの戦い方を編み出した。

魔法の『豊穡の神水』は、本人が意識して使用出来ない為に本来の能力を發揮出来ない。

ちなみに『天地乖離す開闢の星』は、ギルガメスの能力的な問題で1日に1発しか使えない。

さらに言う『混沌に輝く創世の星』は、使い方を思い出せない為に使えない。

ギルガメスの幸運値が異常に高いのは生まれた時からであり、『刺し穿つ死棘の槍』『秘剣・燕返し』『無明三段突き』等の“本来ならば絶対不可避の攻撃”を、自身の幸運だけで回避出来る。

「混沌エヌマに輝く創世エリスの星シユについて」

この宝具は（厳密に言えば違うのだが）一応は乖離剣エアを用いて放つ対界宝具。

ギルガメスが乖離剣エアの使用方法を習得している最中に、乖離剣エアがギルガメスの起源である『進化』に呼応して新たななる宝具として進化した。

形状に変化は無いが、色彩が少しだけ変化している。

金色だった箇所は銀色に、青色だった箇所は赤色に変化した。

ちなみに、刀身部分に変化は無い。

この場合の乖離剣エアは、ギルガメスの力によって進化している為に名称が変わる。この場合の進化した乖離剣エアの名称は、『創世剣アプス』という。

ちなみに、この名称はギルガメツシュが命名した。

創世剣アプスの真名解放は乖離剣エアとは違い、『天地を切り開いた暴風』ではなく『全てを生み出した原初の淡水』を呼ぶ。

振り抜かれた創世剣は原初の水を呼んで、荒れ狂う水の奔流として放たれる。

この原初の水は、取り込むものを全て溶かして、その存在すらも飲み込んでしまう。取り込まれた全てのは魔力に溶けて、創世剣を経由して所有者に魔力として吸収される。

その威力はかなり絶大で、ギルガメツシュとエルキドウがお互いに自身の『エヌマ・エリシュ』を放って漸く相殺出来る程に荒々しい。

ギルガメスがギルガメツシュ指導で『天地乖離す開闢の星』を習得している最中に、偶然生まれたもの。

しかもギルガメスは、無意識の中で使った為にどうやって放ったのかは自分自身でも全く理解していない。

ちなみに父親のエアは乖離剣が進化する事を見越して、『英雄王と同じ乖離剣』と

自身が新たに作成した乖離剣”の2本を予め用意していた。

「閻魔大王（ヤマラージャ）の設定」

《プロフィール》

名前：閻魔大王

真名：ヤマラージャ

性別：男性

身長／体重：168 cm／55 kg

属性：混沌・悪

起源：煉獄

《パラメーター》

筋力：A+

耐久：A+

敏捷：A+

魔力：EX

幸運：C―

《魔術回路》

・メイン魔術回路

↓4000本

・サブ魔術回路

↓各1500本（3000本）

・合計本数

↓7000本

《能力》

<スキル（英霊化した場合）>

1. class別スキル

クラス：バーサーカー

①狂化：E+

通常時は狂化の恩恵を受けない。その代わりに正常な思考力を保つ。

基本的に常日頃から闘争本能に委ねて生きている為、現代社会に適応出来ない。

## 2. 保有スキル

## ① 怪力：A

一時的に筋力を増幅させる。魔物・魔獣のみが持つ攻撃特性。使用する事で筋力値をワンランク向上させる。持続時間は「怪力」のランクによる。

## ② カリスマ：A+

大軍団を指揮・統率する才能。ここまできると人望ではなく魔力、呪いの類である。地獄の統治者として相応しいランクを持つ。

## ③ 心眼（真）：B

修行・鍛錬によって培った洞察力。窮地において自身の状況と敵の能力を冷静に把握して、その場で残された活路を導き出す「戦闘論理」。逆転の可能性が1%でもあるのならば、その作戦を実行に移せるチャンスを手繰り寄せられる。

## ④ 神性：A++

神霊適性を持つかどうか。ランクが高い程に物質的な神霊との混血とされる。地獄を統べる大魔王として最上位の神性を持つ。

## ⑤ 戦闘続行：A++

往生際が悪い。霊核が破壊された後でも、暫くは戦闘行為を可能とする。

⑥ 千里眼：A

視力の良さ。遠方の標的の捕捉、動体視力の向上。透視、未来視さえも可能とする。

⑦ 直感：B

戦闘時、常に自身にとって最適な展開を“感じ取る”能力。視覚・聴覚に干渉する妨害を半減させる。

⑧ 魔力放出：B

武器ないし自身の肉体に魔力を帯びさせて瞬間的に放出する事によって、能力を飛躍的に向上させる。

⑨ 無窮の武練：A+

一つの時代で無双を誇るまでに到達した武芸の手練。心技体の完全な合一によって、いかなる精神的制約の影響下にあっても十全の戦闘能力を発揮できる。

<戦闘技術>

? 地獄の喧嘩殺法：EX

? 冥王式・剣術：A

<魔術>

1. 結界魔術

## 2. 治癒魔術

## 〈魔法〉

## 1. 獄門道

## 2. 閻魔道

## 《容姿》

『機動戦士ガンダムSEED destiny』のシン・アスカ。

服装は、白い七分袖のTシャツ、黒いロングコート（ナポレオンコート）、黒いジーンズ、黒い革靴。

## 《備考》

地獄を統べる大魔王。

本来ならば地獄を離れる事は出来ないが、オシリスがエアに脅されて仕方無く地獄の統治者としての職務から解任された。

ハーデスに並ぶ冥王としての実力は兼ね備えており、ゼウスやオーディンよりも強いのだが、かなり強制的な異世界転生（転移？）によって能力の1/5しか行使出来ない。

それでもやはり強いもんは強いので、雷神ツールと同等の実力は保持している。

エアに護衛を頼まれている為、ギルガメスに対して少し過保護気味。

-----



## 〈第1章〉

## 第一話

—————

—————閻魔大王side—————

—————目を開けたら、はるか上空にいた。

……って、マズイ!!?

閻魔大王「—————ぐおっ!？」

ギルガメス「—————きゃあっ!？」

俺とギルガメスは無事『天獄門』を潜り抜けて異世界へと転生（転移？）出来た。だが座標が中途半端だった所為か、地上ではなく上空に転送されたようだ。

ギルガメス「うおお：っ！！なんじゃ！！此処は何処なのだあああああっ！！？」

ギルガメスは楽しいんだか怖いんだか分からん表情を浮かべて絶叫している。

「……っと、そんな事を考えてる場合じゃないかな！

閻魔王「…：つたく、捕まれ！お嬢！！」

俺はギルガメスに声を掛けて、左腕を彼女に向けて伸ばした。

ギルガメスは、俺の声に気付いて少し躊躇しながら腕を伸ばして来た。

ギルガメス「う、うむ！」

俺はギルガメスの腕を掴むと、俺の愛馬を虚空より呼び出した。

閻魔大王「来い！ーグリフォン!!!」

すると虚空に次元の穴が開いて、そこから一匹の幻獣が現れた。

下半身は獅子、上半身は鷹、さらに大きな鳥の翼を持つそれは、正にグリフォンと呼ぶに相応しい姿をしている。

俺は、真横に並走して来たグリフォンに近づいた。

閻魔大王「乗るぞ、ギルガメス！」

ギルガメス「うえ!?!のゝ乗るう!?!」

俺はギルガメスの承認を得ずにギルガメスを抱き寄せると、並走するグリフォンの背中に跨った。

閻魔大王「このまま降りるから、しっかり掴まってろよ…」

ギルガメス「ちよつ、ちよつと待て！」

ギルガメスは何やら喚き立てているが、俺はそんな事を御構い無しにグリフォンに地上に降りるように指示を出した。

ギルガメスは振り落とされない様に俺の服にしがみ付いた。

そして俺達は、そのまま地上に向けて駆け下りて行つた。

—————

—————

—————

———

———

俺達はあの後、かなりの高度をグリフォンに跨りながら地上に降り立った。

閻魔大王「……ふう、吃驚した……」

ギルガメス「……って妾の方が吃驚したわ！この愚か者めが!!」  
スパアーン!!

そう言ってギルガメスは、俺の頭を強めに引っ叩いて来た。

閻魔大王「……何だよ!!助かったんだから良いじゃねえか!!」

ギルガメス「馬鹿者め！妾はグリフォンに乗るのが初めてなのじゃぞ!!?それを、イキ

ナリあんな乱暴な乗り方で……!!」

閻魔大王「ああ？スリルがあつてとても楽しい初めての（グリフォンの）乗馬……つて事で別に良いんじゃないの？」

ギルガメスは、先程のグリフォンの騎乗を快く思わなかった様で御立腹のようだ。

とは言え、あの状況で上品な騎乗なんざ出来る筈も無く、初めての乗馬がグリフォンであんな状況になったのは、残念としか言いようが無い。

閻魔大王「まあ、ドンマイ。次の初めてはきつと大丈夫だつて！」

ギルガメス「う、うむ？それもそうか……」

ギルガメスは一人で何とか納得出来た様で一先ずは落ち着いた。

そして俺は、取り敢えず周囲を見渡して状況を確認した。

閻魔大王「それで…何処だ、此処は？」

俺の眩きをギルガメスは拾い、それに反応して彼女も周囲を見渡した。

此処はどうやら何処かの草原のようだ。

見渡す限りは草原ばかりで、かなり離れた所には中々にデカイ山脈が見える。

ギルガメス「…ふむ、どうやら此処は地球では無いらしいな。妾はこれ程の大きさの草原を地球で見た事が無い…」

閻魔大王「ああ、だろうな。だが地球よりは狭い星だな。重力は地球の約半分程度、恐らく月よりはデカイか…」

どうやら此処は随分と小さい惑星の様だ。重力も割と小さい為、俺が本気で飛んだら大気圏程度は突き抜けそうだ。

閻魔大王「まあ…取り敢えず、俺達が今いる此処が地球じゃねえのは分かった。

………本当なら地球に転送される筈が、何の因果か知らんが地球以外の惑星に来ち

まったようだな」

俺が取り敢えず今の状況を纏めると、ギルガメスは最後に零した言葉を拾って詰め寄って来た。

ギルガメス「……ん？ 『本当なら地球に転送される筈』だと……？ どういう事だ？」

閻魔大王「アレ……？ 知らねえのかよ？ 俺達が潜った『天獄門』は行き先が安定しないから、本来は地球に座標を固定してから使うんだよ……」

ギルガメス「『天獄門』？」

ギルガメスは、そもそも『天獄門』という言葉すら知らない様だ。

閻魔大王「は……？ お前さん、メソポタミアの神域に住んでたなら『天獄門』くらい使ったことがあるだろ？」



『天獄門』は俺達が住む『神界』と人間達が暮らす『人間界』を行き来する時に最も使用頻度が高い門だ。

その中でもメソポタミアの奴等は、凄え高頻度で『人間界』に行く為、『天獄門』の使用回数は色んな神話体系の中でもメソポタミア神話はダントツのNo. 1だ。

『地獄門』も偶に使う奴はいるが、アレを使うと大抵は冥界か魔界行きだ。

俺の質問に対してギルガメスは不思議そうな表情を浮かべて首を傾けた。

ギルガメス「……………？何を言いたいのか全く分らんが、妾はメソポタミアの神域から出た事は一度も無いぞ」

閻魔大王「……………は？」

ギルガメス「妾はその生涯をメソポタミアの神域だけで過ごした。妾の1世紀にも及ぶ人生はあの神域の中だけで完結しておる」

…つまりギルガメスは『箱入り娘』だと？

閻魔大王「えっ？ちよつと待って…。ならお前は どうして何の疑いも無く『天獄門』を潜った…？」

するとギルガメスは、自信満々な表情を浮かべて笑顔で言つて来た。

ギルガメス「だってアレだろう？あの門を潜ると異世界に行けるのだろう。二次創作ではお決まりの展開ではないか！」

……………成る程。

このガキがどんな思考回路をしてるのか、漸く分かった。  
つまりはアレだ。

コイツ、典型的な転生者みたいな思考回路で動いている。というかコイツの知識は恐らく、ネットから得たものばかりだろう。なんのかんの言って神々も人間の電子端末には興味津々だったのだから、半神半人のコイツがネットにどハマリしても不思議ではない。

それにメソポタミアの神域を一度も出た事がない所為で『世界を越える際の危険性』を理解してない。

俺は少し冷めたかのような表情でギルガメスにとある事を聞いた。

閻魔大王「ギルガメス。お前さ、何で転生しなかったんだ？」

するとギルガメスは、目を爛々に輝かせて飛びつきりの良い顔で答えた。

ギルガメス「決まっておろう!! 妾が転生してまで果たしたい事は、それは――」

閻魔大王「……………それは？」

ギルガメス「トーーーハーレムである!!! 妾はありとあらゆる美男・美女を集めて、妾だけのハーレムを形成するのだ!!!」

……………ですよね。

ギルガメス「妾は母上の勧めで沢山の漫画やらアニメやらラノベやらに手を染めた。果ては二次創作にまで手を出した。そして妾はふと思ったのだ。『父上ならばきつと転生させてくれる』とな!! 事実として、妾の父上はあのメソポタミアの守護神エア。であるならば頼らざる得ない!」

閻魔大王「……………イヤ、まあ」

ギルガメス「だから妾は父上の状況を密かに喜んだのだ。どうやら妾の存在は、他の神々からして見ればあまり良くないものだと言った。そして父上もそんな妾をどうにかしたかったようだし……………」

……………というかソレは、100%エアの自業自得だな。

ギルガメス「そして妾は、死ぬ前に父上に手紙を書いたのだ。『妾が死んだ後は、異世界に転生させてくれ』とな！」

閻魔大王「……………（エアの奴、娘に弱すぎ）」

ギルガメス「そして今、ついに妾の願いは叶った！妾は今後色んな美系キャラを集め、妾による妾の為の妾だけのハーレムを形成するのだ!!」

閻魔大王「あ、そう…ガンバレ」

ギルガメス「うむ、無論だ!!」

ぶつちやけ、ここまで馬鹿正直にハーレムを宣言する奴はゼウス以来である。

……イヤ、まだコイツの方が断然マシだ。ゼウスなんかはこの残念系美女のレベルを軽く凌駕する程の阿保だ。

取り敢えずは………つと。

閻魔大王「まあ、何はともあれ行動しない事には始まらねえし…。そろそろ動くか」

ギルガメス「…ん？動くと言つても、何処に行くのだ？此処から見渡す限りは、草原しか無いのぞ…？」

閻魔大王「それならお前は此処にいるか？悪いが、俺は進むぞ…」

俺が立ち上がって歩き始めるとギルガメスは一瞬だけ不安そうな表情を浮かべた後、すぐに立ち上がって俺の近くに駆け寄って来た。

ギルガメス「……………当然、妾も行くに決まっておろうが。もし置いていったら、父上に言いつけてやる…」

そう言つてギルガメスは不貞腐れたかの様な態度で俺の足を蹴った。

閻魔大王「んっ…そうか」

俺はギルガメスの頭を撫でながら、自身の魔術回路を開いた。

閻魔大王「…なら、行動開始だ」

…ズボツ！

俺は虚空に次元の穴を空けて、その穴の中に腕を突っ込んだ。

閻魔大王「…えーと、コレじゃなくて…。コレでも無くて、えー……………。あつた！」

…スポンツ！

俺は虚空から腕を引き抜くと、少し大きめのコンパスを取り出した。



ギルガメス「……？それは、何じゃ……？」

閻魔大王「コイツは、『コンパス』だよ。ただし、示すのは方角じゃないけどな……」

そう言つて俺はギルガメスと共にコンパスを覗き見た。

ギルガメス「…方角でないのならば、このコンパスは何を示すのだ？」

ギルガメスの質問に俺は少しだけ思案してなるべく分かりやすく説明した。

閻魔大王「コイツが示すのは、『生命体』が発する『魂の鼓動』だ。『魂の鼓動』は生きてゐるのならば、全ての生命体が発する魂の脈拍みたいなものだ。このコンパスは、持ち主を中心に半径5000億km以内で発せられる『魂の鼓動』を感知出来る」

ギルガメス「ほお〜!!素晴らしい品だ、妾も是非そのコンパスが欲しいぞ！」

ギルガメスがコンパスを物欲しそうに見ているが俺はギルガメスにある事を伝えた。

閻魔大王「…多分、お前の『王の財宝』ゲート・オブ・バビロンの中にもあると思うが……」

ギルガメス「なにつ？それは誠か…!?」

閻魔大王「ああ。昔、コレのオリジナルをギルガメツシュが持つて行ったからな…」

ギルガメスは俺の言葉を聞くと、目を爛々に輝かせながら『王の財宝』を開こうとした。

しかし……、

ギルガメス「…うん？ところで閻魔大王。『王の財宝』はどうやって開くのだ…？」

閻魔大王「……………は？」

————ギルガメスは『王の財宝』の開き方を知らなかった。

————閻魔大王 side out ————

———————

## 第二話

―――  
―――閻魔大王 side 1―――

俺は今、猛烈に頭が痛い。

何故かって？それは―――、

ギルガメス「なあ、閻魔大王よ！早く妾に『ゲット・オフ・パピロン王の財宝』の開き方を教えるのだ！」

―――このマヌケ姫の所為だ……。

閻魔大王「……はあ。お前さ、『王の財宝』の開き方も知らねえで一体どうするつもり

だっただよ……？」

俺がギルガメスに呆れながら聞くと、ギルガメスは何故か無駄に形の良い胸を張りながら自信満々に答えてくれた。

ギルガメス「決まっておろう？お前に指南してもらおうつもりだったのだ」

ギルガメスは何故か自信満々に答えてくれたが、残念な事に俺は『王の財宝』の開き方なんぞ知らないし、そもそも俺は教えるなんて一言も言っていない。なんならコイツの転生に付き合うつもりすら無かった。

ギルガメス「そもそも妾は豊穰神エアの娘にしてメソポタミアの姫であるぞ？父上から教わった事は剣と槍と弓の戦闘技術だけである。それ以外は何も教わっておらん」

閻魔王「……（じゃあコイツは何をする為に転生したんだろう？）」

俺はギルガメスの話を一通り聞いて、もう何も考えたく無くなった。

そもそもなんでコイツは俺が同行する事を知ってたんだろうか。

もしかして、エアの奴に教えてもらった？それとも、コイツ自身が希望したのか？

俺はもう何だか面倒になって、取り敢えずコイツの問題を最短で解決する最善策(?)を考ええた。

閻魔大王「……(そもそもコイツは何処まで自分の能力を理解出来てるのか……)」

俺は何故か笑顔のギルガメスを見ながら、この阿保の問題を解決出来る方法を考え抜いていた。

ギルガメス「なんじゃ？何をそんなに妾の顔を見つめておるのだ？もしや貴様、妾の美貌に惚れたか!？」

「……なんてふざけた事を抜かすコイツの頭の中はどうなっているんだか。

とは言え、肉体と能力は英雄王でもソレを依代にしている奴がこれじゃあ……なあ。

「……ん？ 肉体と能力は英雄王……？」

閻魔大王「あつ……：そうか、思い付いた。なんだよ、簡単じゃないか……」

ギルガメス「む……？ どうしたのだ？」

ギルガメスが何やら俺の顔を覗き込んで来るが、そんなのは放って置いて……。  
「……ギルガメスの問題を解決する最善策が見つかった。

ぶつちやけ上手く事が運ぶかは分からないけれど、多分いけるだろう……。」

閻魔大王「……オイ、ギルガメス」

ギルガメス「うん……？ なんじゃ？」

何故か機嫌が良いギルガメスは俺の呼び掛けに反応した。

……何でそんなに機嫌が良いのかは知らんが悪いけど一緒に怒られに行くぜ。

閻魔大王「……悪いが俺は『王の財宝』の開き方なんざ知らないし、知らないものを人に教えるなんて無理だ」

ギルガメス「なっ!? なっ…ならば、妾はどうすればー」

閻魔大王「そこで、だ……。これから俺と一緒に『王の財宝』の使い方を知ってる奴に会いに行くぞ」

ギルガメス「ーー良いのだ!?! ……え?」

俺は呆けたギルガメスを放置して、左手の親指を犬歯で噛み切った。

そして切れた親指から垂れる血を地面に落とすと、俺はそこに魔力を注ぎ込んだ。

閻魔大王「『天獄門』ーー開門…」



すると俺の目の前に、馬鹿でかい白い鳥居が顕現した。

前回と違って行く場所は固定出来るから、今回は割と楽に『天獄門』を展開出来る。

俺は『天獄門』の行き先を定めて『とある英霊の座』へと繋いだ。

閻魔大王「ーーさて、行くか…」

俺はギルガメスの手を掴んでその鳥居に向けて歩き出すと、我に返ったギルガメスが力強く踏み止まった。

ギルガメス「ーーま、待て！行くって、誰に会いに行くというのだ!？」

ギルガメスは酷く狼狽しながら、これから会いに行く奴について聞いてきた。

俺はギルガメスの問い掛けに対して、少し曖昧に答えた。

閻魔大王「だから言ってるだろう…。お前に『王の財宝』の使い方を教えてくれる奴だって…。まあ…ちっと不安かもしれないが、多分大丈夫だろ…」

ギルガメス「…多分!?多分じやと!!絶対にイヤじやつ!妾はそんな不安になる様な輩とは、絶対に会いとうない!!!」

閻魔大王「…大丈夫だつて。基本的に怒らせる様な事しなきゃ殺されないから…」

ギルガメス「殺される!!?其奴は怒ると殺すのか!?イヤじやつあつ!!!妾はまだ死にとうない!!せつかく手に入れた念願の自由じやつぞ!こんな僅か一日程度で諦めたくないわ!!!」

そんな事を叫びながらギルガメスは俺の身体にめつちや全力で抱きついて来た。

……っか、結構力強い……っ。

ちよつと、肋骨とか痛いんだけど!

ギルガメス「…うう、ぐずつ…!!」

……はあ、全くしょうがない。

俺は泣きベソかいているギルガメスの身体を持ち上げた。

ギルガメス「ぐずつ……！行かんぞ……！絶対に妾は行かんぞ……。殺されとうない！」

ギルガメスは未だに泣きベソかいてるが、俺はそんなギルガメスの前髪を後ろに流して顔を覗き見た。

閻魔大王「……ギルガメス。良いか、よく聞け……」

俺はギルガメスの涙を拭って、少し優しめに接しながら言い聞かせた。

閻魔大王「これから会いに行く奴は、別に悪い奴って訳じゃないんだ。ちよつと性格がキツイだけなんだ……」

ギルガメス「ううっ……！……だがっ!!……其奴は、怒らせてしまうと……っ、殺すのであ  
ろう……？」

閻魔大王「怒らせなきや良い話き。なに、大丈夫だ。怒らせたって、今回は俺が居る  
だろ？ちゃんと守るから、なっ？」

ギルガメスは俺の言葉を聞くと、顔を伏せながら小指を突き出して来た。

ギルガメス「……ならば、指切りじゃ。もし守れなければ、深淵に叩き落とす……」

閻魔大王「はいはい……了解」

俺はギルガメスの小指と俺の小指を絡めて指切りをした。

ギルガメス「約束じゃぞ！絶対になぞ！」

閻魔大王「分かってるって…」

俺はギルガメスと指切りをした後、ギルガメスを地面に下ろした。  
そして俺達は『天獄門』に足を向けた。

閻魔大王「……それじゃあ、行くぞ？」

ギルガメス「……う、うむ」

——俺とギルガメスは、『天獄門』を一緒に潜って『王の財宝』の使い方をおこの世で一番良く知ってる奴に会いに行った。

『古代ウルクの王・ギルガメッシュ』に。



妾——ギルガメス——は今、何も無い空間を歩いている。  
——妾の隣を歩く男に手を引かれながらではあるが。

妾の手を引いているのは『閻魔王』。

インド神話や仏教などに置いて高い知名度を誇る大魔王だ。

転生する時に父上から護衛として紹介されたのだが、メソポタミアの神域でしか生活した事がない妾からしてみれば『こんな男が本当にあのティアマトやフワワ等よりも強いのか?』と思う。

父上は『困った事があつたら、閻魔王に頼ると良い。きっと助けしてくれるからな』と言っていたが、こんなに幼い容姿をしている男が頼り甲斐があるのか。

見た目はまるで17歳程度の童わらべである。

……まあ、確かに此奴はカッコいい風貌はしているのだが。

妾はドンドン先に進んで行く閻魔王に手を引かれながら、何も無い空間を2人だけで歩み続ける。

かれこれもう3時間は歩きつ放しだ。

妾は少し退屈になって来たので、閻魔大王に何か話をするように声を掛けた。

ギルガメス「のう、閻魔大王よ…」

閻魔大王「んあ？何だよ…？」

ギルガメス「妾は少し退屈になった。何か話せ。出来れば面白い話が良いな…」

閻魔大王は妾の要望を聞いて、思案したかの様な態度をとった後に口を開いた。

閻魔大王「…俺の娘の話でも良いか？」

ギルガメス「…ぬっ？娘じゃと…？お主、子などおったのか？」

閻魔大王「まあ、昔は結構な頻度で吉原に出入りしてたからな…。そこで俺の子を身籠もる女もいたんだよ」



ギルガメス「なぬっ!?という事は、お主もハーレムをー」

閻魔大王「ーそんな訳あるか、ボケ…。吉原の花魁は基本的にプロだぞ。身籠ったのは、自分から望んで孕んだ奴だけだ。実際には僅か4人しか孕ませて無いしな。生まれた子達は、1人を除いて純粋な人間として生まれている」

ギルガメス「それでも、4人も孕ませておるではないか!!しかも自分からじゃと!?なんと羨ましいシチュエーションだ…!」

閻魔大王「……………まあ、ともかくその娘の話だけだな。今、1人を除いて純粋な人間として生まれた…って言ったよな。その1人つてのが、その娘なんだよ…」

閻魔大王は歩く速度を変えずに進みながら話を続けた。

閻魔大王「アイツは、神の血を1/3も引いて生まれた。基本的に俺達みたいな高位の神は、人間との間に子を成す事が難しい上、生まれる子だって大半が純粋な人間の子

供として生まれる。どうしたって普通の人間は、神の血を耐え切れるだけの肉体を持たないからだ……」

ギルガメス「ぬ……？しかしして妾は半神半人として生まれたぞ……？」

それを聞いた閻魔大王は不思議そうな顔をした後、妾の母について聞いてきた。

閻魔大王「……ギルガメス、お前の母親の人種と出身地は分かるか？」

ギルガメス「……う、うむ。母上は日本人とシリア人のハーフじゃ。生まれはシリアのアレッポと聞いておる。ちなみに、日本で育ったそうだぞ……」

妾が少し母上の身の上をしたら、閻魔大王は何やら納得した様な表情を浮かべた。

閻魔大王「……成る程な。だからエアの血を引く子を産めたのか……」

ギルガメス「……？何が『成る程』なのだ？」

閻魔大王「お前が半神半人として生まれた理由だよ…。――まあ、ソレは置いといて俺の娘の話だったな。取り敢えず、そんな低確率でしか生まれない子供として生まれたアイツはお前と同じ様に俺の神域のみで、その生涯を過ごした」

ギルガメス「ふむ……続ける」

閻魔大王「……だけど、完全な半神半人じゃなかったアイツの生涯は、僅か20年で終わった。俺の神域はメソポタミアの神域と同等の神秘性を誇る。インドの神域“。メソポタミアとインドの神域は、普通の人間なら入った瞬間に即死するレベルの神秘性の濃さだ。ちなみにメソポタミアやインドみたいに、神代の頃と全く変わらない環境の神域を“絶対神域”って言うんだよ。完全な半神半人であるお前は完璧に適応出来ていたんだろうが…。生憎と俺の娘は中途半端に人間としての血が多かった所為で、神域に適応が出来なかった」

ギルガメス「なっ…!?神域とは、安全で安心出来る絶対の不可侵領域ではなかったの

か!!?」

妾が神域の知らない一面に驚いていると、閻魔大王は『やはり』と言った顔をした。

閻魔大王「やつぱり、何にも教えて貰えてなかったんだな…お前」

ギルガメス「じゃ…じゃがっ！なら何故、母上は80年も神域で生きておった!?!母上  
が妾を産んだ時の年齢は15歳。人間ならば老衰で死んでも可笑しくなろう！母上  
は妾が死ぬその時まで息災であつたぞ!!」

閻魔大王「…それ、生きてたんじゃなくて死者として住んでたんじゃね…?人間の女  
は神の血を引く子を産む時に、かなりの高確率で死産するらしい。実際に『菖蒲』<sup>あやめ</sup>の母  
親は産んだ直後に死んじまつた…」

ギルガメス「『菖蒲』…?」

閻魔大王「さつき話した俺の娘だよ…」

先程の話にあつた閻魔大王の娘は『菖蒲』あやめという名らしい。

……それよりも此奴は今、聞き捨てならん事を言った。

ギルガメス「母上が死者だと……？」

閻魔大王「それ以外には考えられないな。何の能力も持たない生きた普通の人間は、メソポタミアやインドみたいな神秘性が濃厚過ぎる『絶対神域』で暮らす事が出来ない。もしも、普通の人間が『絶対神域』で暮らせるとしたならば、やはり死後でなければ入る事すら叶わない……」

ギルガメス「そ、そんな………」

閻魔大王は、緩めていた足の速度を戻してまたドンドンと進み始めた。

閻魔大王「……まあ、とにかく俺の娘の話はコレで終わりな。少し長話になったけれど取り敢えずは、もうちよつとだけ歩くぞ。もう少しで着くからな……」

そこで妾は、ふと思った。

“そういえば、これから妾はこれから会う輩の名前を聞いてない……”  
妾は閻魔大王に、これから会う輩について問い質した。

ギルガメス「そういえば閻魔よ……。妾はこれから会う者の名を聞いておらぬ」

閻魔大王「ん……？　そういや、アイツの名前とか言つてなかったけ……？」

ギルガメス「そもそも、妾達は一体何処に向けて歩つておる？　妾はこんな場所をメソポタミアの神域でも歩つた事は無いぞ……」

閻魔大王「それも言つてなかったか？」

ギルガメス「そうじゃ。はよ言わんか！」

妾が早く答える様に急かすと、閻魔大王は妾の顔を見つめて答えた。

閻魔大王「——これから俺達に向かう場所は、英霊の座”つていう場所だ。そこで此処は、”多次元世界”と”英霊の座”を繋ぐ”境界通路”だ。”英霊の座”がある世界にこの通路は存在しないが、その世界と他の世界の間には”境界通路”は存在する」

ギルガメス「”境界通路”……」

閻魔大王はこの何も無い空間を通路と呼んでいるが、妾には全く通路に見えない。というかこの空間が仮に通路だとしても、何故この男は道を間違えずに進める…？妾が見渡す限り、この空間には何も無い。当たり前ではあるが、標識も看板も地図も案内人も無い。

本当にこの空間には何も無いのだ。

………というか、ちよつと待て。

ギルガメス「……貴様、先程『英霊の座』と言わなかったか………?」

妾が引き立った表情で先程聞いた行き先を確認すると、閻魔大王は不思議そうな顔を  
して頷いた。

閻魔大王「え……? ああ、言ったな」

『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』の扱い方を知っている……

行き先は『英霊の座』……

悪い奴ではないが性格がキツイ……

……あれ……? もしかして……。

ギルガメス「もつ……もしや、わ……妾達は、あの、ウ……ウルクの王に、会おうと……」



閻魔大王「……おう、そうだぞ。俺達がこれから会う奴は『英雄王』だ。世界最古の英雄『ギルガメツシュ』にな……」

「……妾はその名前を聞いたのを最後に意識が途絶えた。」

「……ギルガメス side out……」  
「……」

## 第三話

――  
――ギルガメス side――  
――

何やら、誰かの声が聞こえる。

「……い、………」

………ん？

とうとうか、何故か妾の視界が暗い。

「……イ、……き………」

…うん…っつ？

あつ、少しずつマトモに聞こえて来た。

閻魔大王「オイ！起きろお!!」

ギルガメス「ーぎやあああつ!!？」

妾は突如デカくなった声に驚いてしまい、はしたない奇声を上げてしまった。

ギルガメス「なっ、何じゃあ!？」

妾は咄嗟に身の回りを見渡して、そして隣に座る男ー閻魔大王を見つけた。

閻魔大王「よお、起きたかよ…?」

ギルガメス「うっ…うむ。して、此処は…何処じゃ一体…?」

妾は周囲を見渡すと、まず最初に真つ白い風景が目に入った。そして閻魔大王の背後には、かなり大きい黄金の扉が見える。閻魔大王は、そんな妾を見て口を開いた。

…  
閻魔大王「……此処は『英雄王ギルガメッシュ』の『英霊の座』に続く門の前だ」

ギルガメス「…っ!」

妾は閻魔大王が告げた名前にビクツと反応して、自身の身体を震わせた。

ギルガメス「そんなあ…嘘、じゃろ…？そんな…妾は未だに、…心の…準備がー」

閻魔大王「ハイハイ、分かってる。緊張で不安なもの分かるが、そんな心構えなんざアイツには不要だ」

妾が「本物の英雄王」との邂逅を目前に恐怖しているのを、閻魔大王は落ち着いた様子で見つめていた。

閻魔大王「…大丈夫だって！お前のアイツに対するイメージよりかは、割と穏やかだからさ。そもそもアイツが不機嫌だったのは、冬木市に呼ばれた時だけだから！」

ギルガメス「…し、しかしー」

閻魔大王「それに、最近のアイツは『とある目的』を成し遂げる為の手駒を求めている。もしかしたら、お前ならイケるかもな…」

ギルガメス「……?」

妾は閻魔大王の言う『ギルガメツシュが成し遂げようしている目的』に、少し興味が湧いて来た。

閻魔大王「まつ！取り敢えずは英雄王に会いに行くぞ。お前が『ゲート・オブ・バビロン王の財宝』の使い方を知っていてくれないか、お前も俺も互いに困るだろ?」

ギルガメス「……うむ」

妾は閻魔大王の話を聞いて、英雄王と会う決心をつけた。

閻魔大王は、そんな妾の右手を取って握ると立たせてくれた。

閻魔大王「それじゃあ、行くぞ?」

ギルガメス「う、うむ！」

妾と閻魔大王は、黄金に輝いている巨大な門を開いて潜った。

|||

|||

|||

||

||

|||

|||

――

――其処はまるで、妾が住んでいた古代都市のウルクとは異なる世界だった。

妾が生涯の大半を過ごしたウルクと同様に神秘は濃厚だ。

………しかし、このウルクは、

――なんと力強く輝いていることか!!

――なんと熱く滾っていることか!!

――なんと眩く煌めいていることか!!



此処は古代ウルクの王にして英雄王であるギルガメツシユの「英霊の座」。  
今までの真つ白い風景とは一転して、その光景は正に黄金都市そのものだ。

「……そして奥の玉座には『黄金甲冑を身に纏った男』が、その身が持つカリスマを惜しげも無く解き放っていた。

妾は、そのカリスマに吞まれない様に気を引き締めて話しかけようとした。

ギルガメス「……っ！あ、あの……」

?????  
「……貴様か、地獄の統治者よ」

その男——ギルガメツシュ王は、妾の存在を認識してない様な態度で閻魔大王に向けて口を開いた。

閻魔大王「…よつ、久しぶり！相変わらず、お前の『英霊の座』は異彩を放ってるな」

ギルガメツシュ「フツ、我を誰と心得る！古代ウルクの王であるぞ。そこらの凡夫な英雄共と一緒にされる覚えはない」

閻魔大王「…相変らずのデカイ態度だな。まあ、今回はそんなお前に頼みがあつて来たんだよ」

閻魔大王がギルガメツシュ王に頼みがある事を告げると、ギルガメツシュ王は視線を一瞬だけ妾に寄越して不機嫌そうな表情で答えた。

ギルガメツシュ「…もしましや、そこな雑種の事ではあるまいな？」

閻魔大王はそんなギルガメツシュウ王の態度など気にもせず、素直に頷いてみせた。

閻魔大王「おう、勿論さ。今回は――」

――ヒュンツ！

ガシツ!!

ギルガメス「……………へ？」

……………妾は今、何が起きたのか全く分からなかった。

だが、ギルガメツシュウ王の背後に生まれた黄金の波紋と閻魔大王が握る宝剣『メロダック原罪』と『デユラシタル絶世の名剣』を見て理解出来た。

妾は今、ギルガメツシュウ王に殺されかけて閻魔大王に護られたという事を。

閻魔大王「…イキナリかよ、英雄王」

ギルガメツシュ「邪魔するな、鬼神め」

閻魔大王が『原罪』と『絶世の名剣』を足元に放り投げると、光の粒子となつて虚空に消えた。

ギルガメツシュ王は、その紅い赤眼に殺意と激怒の感情を灯しながら、閻魔大王と妾を睨みつけて来た。

ギルガメツシュ「…貴様、この私の目的を知った上での愚行か…っ！」

ギルガメツシュ王はそう言うのと、その背後に20をも超える『王の財宝』の砲門を開いて、予先を妾達に向けて来た。

ギルガメス「…ひゃあっ!!？」

妾は初めて見る本物の『王の財宝』の矛先を向けられて怯えてしまい、閻魔大王の背後に隠れた。

閻魔大王「…つて、オイオイ。お前がアイツから隠れてどうすんだよ…？それでも、エアの娘ですかあ!?このヤロー!」

ギルガメス「う、うるさい!妾とて好きで怯えておる訳ではない!ただ、あのギルガメツシュユ王を相手にメソポタミア出身として、どんな顔して会えば良いのか精一杯に考えておるのだ!!」

閻魔大王「…どんな顔つて、そりゃあエアの娘らしい面してりや良いだろ…?」

ギルガメス「きつ…貴様!?!何という無礼な事を言うのだ!そんな真似したら、妾はギルガメツシュユ王に殺されてしまうぞ!?!というか、何故ギルガメツシュユ王はあんなにも殺気を放つておるのじゃ!?!」

閻魔王「あー…。今のアイツはな、ちとキレやすいんだよ。まあ…何であんなにも怒り狂ってるのかは、自ずと分かるさ…」

妾達がそんな下らない言い争いを繰り返していると、ギルガメツシュ王が不思議そうな目を妾に向けて来た。

ギルガメツシュ「……む…？オイ貴様、もしや今エアの娘と言ったか？」

ギルガメス「…へっ？」

妾は唐突にギルガメツシュ王に話しかけられて、間拔けた声を出してしまった。

ギルガメツシュ王はそんな妾を見て、質問の答えを急かして来た。

ギルガメツシュ「早く答えよ。もし虚言であるならば、その身体を串刺しにするぞ」

ギルガメス「うう…う、うむ！妾は確かにメソポタミアの豊穰神エアの娘じゃ!!」

ギルガメツシユ「…ほう」

妾はギルガメツシユ王に宣言するかの様に高らかに声を上げた。するとギルガメツシユ王は座っていた玉座から立ち上がり、妾に向けて言い放った。

ギルガメツシユ「…オイ、雑種。特別だ、もう少し近くに寄れ」

ギルガメス「へ…？えっ？…え??」

妾はギルガメツシユ王に何を言われたのか一瞬分からなくなつて、ギルガメツシユ王と閻魔大王を交互に見た。

閻魔大王「つまりは、『もう少し良く顔を見せてくれ』だとよ…。ほら、行きな」

ドンッ。

閻魔大王は妾にそう言つて、妾の背中を押した。

ギルガメス「…つとお!? なっ、何をするのじゃ?!」

閻魔大王「良いから、早く行きな」

閻魔大王はそんな妾を急かして、早くギルガメツシュウ王の元に行く様に言った。

ギルガメス「…っ！む、むう…っ」

妾はゆつくりとギルガメツシュウ王の元に少しずつ歩み寄った。

ギルガメス「…ううっ…」

しかして、ギルガメツシュウ王の近くに歩み寄る度に感じる王として風格。

ギルガメス「…っ」



吞まれまいと気を強く持つが、近づく度に感じるそれはさらに増大していった。  
「……そして、

ギルガメツシュ「……何を躊躇っているのだ、雑種。早く来い」

ジャラララララッ!!

ギルガメス「…なあっ!？」

ギルガメツシュ王は躊躇う妾の四股を銀色に輝く鎖で絡めて引っ張った。

ギルガメス「きやあっ!？」

妾は突然の事に驚いて、生娘の様な声を出してしまった。

そして四股を縛る鎖の痛みに耐えかねて、妾は目を瞑ってしまう。

ギルガメツシュ「ほお…肉体は素晴らしい出来ではないか。その整えられた黄金比の

肉体は、まるで我オレの性を反転させたかの様な容姿をしているな」

すぐ近くで、ギルガメツシュ王の声が聞こえてくる。

ふと目を開けると、ギルガメツシュ王の風貌が妾の目の前にあった。

ギルガメス「……ううっ／＼／」

妾はその美しい容姿と強い王の威圧に当てられて、少し顔が熱くなっていくのを感じてしまった。

妾はすぐにギルガメツシュ王から離れようとして精一杯に抗ってみるが、妾の身体を縛る鎖は『天エルキドゥの鎖』。

神性を持つ者に対して絶大な拘束力を発揮する宝具。高過ぎる神性を持つ妾の身体では抜け出す事など出来やしない。

ギルガメツシュ「……ん？これは……」

ーークイ。

ギルガメス「…っ？」

妾の身体を見ていたギルガメツシュ王が、ふと不思議そうな表情を浮かべた。  
ギルガメツシュ王は、妾の顎を掴んで目を覗き込んで来た。

………というか、コレって「顎クイ」…？

ギルガメツシュ「っ…！…っ!?」

妾はソレを理解すると、頭の中が真っ白になって少しパニック状態になった。  
だがギルガメツシュ王は、そんな妾の様子なぞ気にもせずに見つめ続けていた。  
そしてギルガメツシュ王は、その双眼に静かな怒りを灯し始めた。

ギルガメツシュ「………どうやら貴様は、不躰にもこの我オレの身体と蔵くらを有しているよ  
うだな……！」

ーーーーゾクっ!!

ギルガメス「……ひいつ!!?」

妾は至近距離でギルガメツシュ王の怒りに当てられて、かなり萎縮してしまった。

ーーーーそして『殺される』と思った。

この恐怖の感覚は、覚えがある。

以前にも同様の恐怖を感じた事がある。

そう、アレは確か……怒り狂ったイシュタルに八つ当たりをされた時だ。

だが今回は、女神のソレとは比較にならない程の恐怖を感じた。

ギルガメス「……っ!」

妾は威圧に身を固めてしまい、終いには死の恐怖に怯えて目を固く閉じた。

ギルガメス「……………っ？」

……………しかして、その時は来なかった。

目を開けてみると、そこには相変わらずのギルガメツシュ王の顔があった。だがギルガメツシュ王の表情には、怒りを感じられなかった。

……………というよりも、コレは——、

ギルガメス「うう……………？」

ギルガメツシュ「…ふむ。このまま殺してしまうには、ちと惜しい女だ」

ギルガメツシュ王は、妾を見つめながら何かを悩んでいるようだった。

そして、ギルガメツシュ王が妾を見つめる視線から感じるものは、それは決して怒りではなかった。

ギルガメツシュ王の視線からは、まるで妾を見定める様な感覚を感じる。

ギルガメツシュ王は長考の末に、妾を見定める様な目を向けながら問い掛けて来た。

ギルガメツシュ「……貴様は、我が財宝をもつて何を成したい？我が肉体をもつて何に至ろうというのだ？返答次第では例え魔王に邪魔されようとも、その命は確実に刈り取るぞ」

ギルガメス「……妾が……成したい事、妾の……至ろうとする……」

ギルガメツシュ「雑種、貴様が願う表層の願いでは無いぞ。我が知りた<sup>オレ</sup>いのは、貴様の最奥に巣食う願望だ」

ギルガメス「……妾の、本当の……願望……」

ギルガメツシュ「そうだ。貴様の最も強く願う願望。脆く儂く弱々しいが、しかして人間らしい欲望。最奥にある“ソイツ”をこの我に聞かせてみよ」

ギルガメツシュ王が問い掛ける妾の願望。悩む必要なんて無いのに……  
“考え”と  
“答え”が纏まらない。

妾は美男・美女のハーレムを……。

……ずっと昔から欲しかった。

誰もが妾を褒め称える園を……。

……死ぬまで求めて止まらなかった。

妾だけに優しく甘い愛情を……。

——忘れられる筈が無い。

妾が最も欲しているのは……。

——妾が本当に求めていた願望。

【妾が願う願望は——】



ギルガメス「……………しい」

ギルガメツシュ「…ん？」

ギルガメス「妾は……………しい」

ギルガメツシュ「…聞こえぬ」

ギルガメス「妾…友……………し…」

ギルガメツシュ「…聞こえぬと言っている!!この我オレに然りと貴様のその願望を聞かせて見せろ!!」

――――ツ  
!!!!

「ギルガメス「――妻は…!!…友がつ！親しい友が…っ!!一緒にいてくれる友が欲しいのじゃああああ!!!」

………言ってしまった。

父にも母にも言うまいと思っていた、妾の本当の願望。誰にも聞かせたくなかった、妾だけの本当の欲望。

———そうだ、妾はハーレムが欲しかったのでは無い。妾が本当に欲しかったのは、

「妾と一緒にいてくれる親友」だ。

ギルガメス「…う…つ、づう…！」

妾は顔を下に向けて泣いていた。

ギルガメツシュ王は何も言わずにいる。

閻魔大王も何も言わずにいる。

ただ、2人からは侮蔑の感情は無かった。

単に見つめられているだけだ。

そして、ついにギルガメツシュ王がその口を開いた。

ギルガメツシュ「……ソレが貴様の本当の願いか？ 貴様の最奥にある願望か……？」

ーコクン。

ギルガメス「……うむ」

妾はギルガメツシュ王の問い掛けに対して頷いた。

妾は嗤われる覚悟は出来ていた。

エアの娘の願いが“親友”だなんて……

きつと、嗤われる。嘲笑われてしまう。

「……しかして、ギルガメツシュ王から聞こえてきたのは『嘲笑』では無かった。……それは、まるで、

ギルガメツシュ「……フハハハハハッ!!」

楽しそうな『笑い声』だった……。

ギルガメス「……え？」

妾はギルガメツシュ王の高らかな笑い声を聞いて、顔を彼の王に向けた。

ギルガメス「何故、なのじゃ……? ……何故、そんなにも……楽しそうに、笑える? 何で、嘲笑わぬのじゃ……? 妾の願いは……王の願いでは無いっ! 妾の本当の願いは……」

妾がギルガメツシュ王に『何故そんなにも楽しそうに笑えるのか』を問うた。

しかし、その途中でギルガメツシュ王は、妾の言葉を遮って答えた。

ギルガメツシュ「——まるで童わらべのような願いだ…か？」

ギルガメス「……っ!？」

ギルガメツシュ「……確かに貴様の『友が欲しい』という願いは、王者たる者の願いでは無い。はつきり言つて、貴様の表層の願いである『酒池肉林ハレムの形成』の方が凡骨な王の欲望とも言えるだろうよ……」

ギルガメス「ならば、何故…?」

『そんなにも肯定的に笑える?』

そんな意味を込めて、ギルガメツシュ王を見つめた。

ギルガメツシュ王は、そんな妾の視線を真正面から受け止めて、答えてくれた。

ギルガメツシュ「……だがない、貴様の『友が欲しい』というその願いは王としてではなく、人としての願いだ。貴様の願望は、実に人間らしい贅沢な願望だ」

ギルガメス「……えっ？」

ギルガメツシュ王が何を言っているのか、妾は分からなくなつて来た。だがギルガメツシュ王は、そんな妾の動揺なぞ気にもせず話を進めた。

ギルガメツシュ「貴様は今、あらゆるモノを手にしている。

『不老不死なる体質』

『エアの血筋』

『半神<sup>我</sup>半人の<sup>身</sup>肉体』

『王<sup>ゲート・オブ・バビロン</sup>の財宝』

これら全ては人間ならば、一度は求めては止まないモノだ。特に『王の財宝』は、我<sup>オレ</sup>

の蔵であるからな。世界中の凡夫共が欲しているだろうな。貴様も我オレの能力と身体を欲していたクチだろう…？」

ギルガメス「う、うむ…」

ギルガメツシユ「我オレが統べるこの世界とは異なる “異世界” では、どうやら我オレの蔵——つまり『王ゲート・オブ・バビロンの財宝』を求める凡俗な雑種が多いと聞く。しかも “異世界” の神々共は、この我オレの許しも無く『王ゲート・オブ・バビロンの財宝』を勝手に雑種共に与えているそうだな…」

ギルガメス「……っ！」

妾は何も言えなかった。ギルガメツシユ王の言い分は、理解出来るからだ。何よりも、妾も “その雑種共” と同じ穴の貉である。何かを言える立場でない。

ギルガメツシユ「…だが、そんな雑種共と貴様は “ある一点” のみ決定的に違う。凡俗な雑種共は、元が只の人間であるが故に “魂が脆すぎる”。ほんの些細な事で亀裂が入り、簡単に崩壊する。例えば…只の殺意のみ、とかな」



ギルガメス「…？殺意…？」

ギルガメツシュ「…どうやら気付いておらぬ様だが、我が貴様オレに向けた殺意を乗せた殺気」は並の人間ならば即座に気を失うぞ。英雄であつたとしても『常勝冬木のの騎士王セイバー』の様な少しでも魂に歪みが出来れば、立つては居られまい」

ギルガメス「…なっ!!？」

妾は今までギルガメツシュ王から向けられていた殺気に、それ程まで重い殺意が込められていた事に驚愕した。

ギルガメツシュ「…その様子だと、やはり気付いて無かつたようだな。我が本気オレで殺意を剥き出しで殺気を放つたのは、盟友エルキドゥが呪われた時以来だ。本来ならば、凡俗な神程度なら臆する程のもののだがな…。もしや貴様、過去に神の怒りを買つた事でもあるのか？…ん？」

どうやら先程まで浴びていた殺気は、ギルガメツシユ王の本気マジの殺気だったらしい。ギルガメツシユ王が後半部分については、ニヤつきながら聞いてきた。

ギルガメツシユ「……まあ、それは良い。話を戻すぞ。貴様が手にした『オレの身体』と『王バビロンの蔵』は、世界中の凡骨な雑種共が求める程の価値がある。そこいらの凡骨であれば、オレの能力を過信して『友』という価値を見失う」

ギルガメツシユ王は話を戻して、先程の話の続きを聞かせてくれた。

ギルガメス「……『友』？」

ギルガメツシユ「……そうだ。そんな凡骨の雑種共は『友』を捨てる代わりに『女』や

『男』を求めぬ。奴等はな、『ただ唯一の盟友』よりも『何処にでもいる有象無象の雑種』を選ぶのだ」

ギルガメス「なっ…!? 友を捨てるとは！何故、そう簡単に捨てられるのじゃ!?!」

妾は驚きを隠せなかった。

妾がネットで拾った知識には、そのような輩は居なかつたのだ。

『友』を捨ててまでも、『男』や『女』を求めぬ者達。

其奴等は、何故…。

何故そんな簡単に友情を捨てられるのだ？

何故そんな簡単に友情を見失えるのだ？

だつて…それは、妾が最も欲しいものだ。

妾を慕ってくれる下僕よりもー

妾の両隣で愛でてくれる愛人よりもー

妾に尽くしてくれる家臣よりもー

妾が最も欲しい『友情』を何故そんなにも簡単に捨てられるというのだ…？

ギルガメツシュ「……だからこそ貴様の願いは、信に値するのだ…ギルガメスよ」

ギルガメス「…え？」

ギルガメツシュ王はその瞳に静かなる怒りを宿しながらも、しかして妾の心を見透かしたかの様な視線を送って来た。

ギルガメツシュ「…そこらの凡骨な雑種が簡単に『友』を見失う中で、貴様は『友』を欲するという願いを求めた。確かにそれは王たる者の願いではないが…まるで童わらわのよ  
うな願いではあるが、人としては贅沢な願いではあろうか？」

ギルガメツシュ王の言葉はまるで妾が知るギルガメツシュ王ではないようで……。しかしてその言葉には、人を捌いて導く王としての思いが込められていた。

ギルガメス「……うーう、うむっ!!」

妾の返事を耳にしたギルガメツシュ王の顔には『愉悦』の表情を浮かべた。

ギルガメツシュ「良い返事だ、雑種……否、ギルガメスよ。その身に秘めたあらゆる欲望、その眼に宿した生への渴望、その心に潜む貪欲な願望、この我が認めよう！我が肉オレと財宝を扱う権限。本来ならば有り得ん事だが、貴様だけは特別に許そう」

ギルガメス「……へ？」

妾はギルガメツシュ王が発した言葉を耳にして、間抜けた声を出してしまった。

……というか、今……

ギルガメス「妾の名を……」

「……ガチャンツ！」

ギルガメツシユ王に妾の名前を呼ばれた事に驚いていると、今まで妾の身体を縛り付けていた鎖『エルキドゥ天の鎖』が解かれた。

ギルガメス「え？あつ……」

妾が呆けていると、今までずっと静観していた閻魔大王が話を切り出した。

閻魔大王「……さてと……そんじゃあ、本題に入るぞ。俺達が『英霊の座此処』に来た目的

は、お前だけにしか出来ない事だからだ」

ギルガメッシュ「ほう…我オレにしか出来ない事だと？事の次第は理解しているが、ソレは我オレでなくとも解決出来る案件であろう？例えば…『雑種ギルガメス』の『父親エアア神』とか、な」

閻魔大王「そりゃあ…そうだけど。お前の方が确实だし、『アイツエア』はお前と違って『葦』を持つてるだけだし…」

ギルガメス「…??？」

妾は2人が何を言っているのか、少し分からなかった。

『王ゲイト・オブ・パビロンの財宝』の話をしているのは理解しているが、2人の言い方ではまるで妾の父が『王ゲイト・オブ・パビロンの財宝』を持つているかの様な言い方である。

ギルガメス「…オイ、閻魔。先程から何を言っておるのじゃ…？まるで『エア妾の父』が、

『英雄<sup>王</sup>の蔵<sup>財宝</sup>』を所有しておるような言い方ではないか…?』

妾は不思議そうに聞いてみると…、

閻魔大王「は…? 何言つてんの? 持つてるに決まってるじゃん。『アイツ<sup>エ</sup>』は、このギルガメツシユが “この世界” で誕生した時には既に『王の財宝』を手に入れてたんだよ」

…トンデモない事実を耳にした。

ギルガメス「…え?」

妾は驚き過ぎて、気の抜けた声しか出せなかった。

そんな妾を見てギルガメツシユ王は、さらに不思議そうな表情を見せた。



ギルガメツシュ「オイ…ギルガメス雑種。まさかそんな事も知らずに、ずつとウルクで生きていたのか？ エアの娘であるならば…共に暮らしておれば、エアが『我が蔵』王の財宝を持つている事くらいは気がつくであろう…？」

ギルガメス「っ……………！」

妾はギルガメツシュ王の言葉を耳にして、少し気分が悪くなった。

閻魔王「…ん？ おい、どうした？ なんか顔色が悪いぞ…」

妾を氣遣つてくれる閻魔王に対して、妾は小さく呟いた。

ギルガメス「…緒……………、…かつ…」

閻魔大王「…ああ？聞こえねえよ」

ギルガメス「一緒…、…かった」

ギルガメツシユ「聞こえぬぞ、『ギルガメス雑種』」

妾はギルガメツシユ王に促されてしまい、仕方無くちやんと答えた。

ギルガメス「…一緒では、なかった…！」

閻魔大王「あ…？一緒じゃなかった？」

ギルガメス「…妾が幼かった頃の1年間だけ共に過ごしたが、妾がウルクの学び舎に通う頃には既に居なかった」

妾が正直に昔のことを話すと、閻魔大王もギルガメツシユ王も少し難しい表情を浮か

べていた。

そしてギルガメツシュ王が、難しい表情を引つ込めて口を開いた。

ギルガメツシュ「……まあ、知らぬならば仕方あるまい。気にするな……」

ギルガメツシュ王の言葉を聞いても、妾は未だ気持ち晴れないが、それでも今回はこれ以上気にするのをやめた。

妾はこの気分を払拭する為、これから何をするのか聞いてみた。

ギルガメス「……して、閻魔大王よ。妾はこれから何をすれば良いのじゃ？」

閻魔大王「ん？ああ…そう言えば、キチンと話してなかつたな」

閻魔大王は妾の問いを聞くと、一度ギルガメツシュ王を見て答えた。

閻魔大王「……………まず最初に、英雄王とタイマンで戦って欲しい」

……………ギルガメス side out……………  
……………